選んだ。五十年もの会員もまだ一年の会員も、みな同じような思いで会い、来年を約してこのように別れた。

濱坂町濱坂という地名ありき　今も私の戸籍に記さる　　森祐希子

神戸全国大会オプションの小旅行で、日本海側の鳥取に近い湯村温泉そして浜坂に行った。その折、作者の本籍地が浜坂で、幼いころに浜坂に来たことがあると聞いた。過日の市町村合併で、浜坂町は兵庫県美方郡新温泉町浜坂となった。つまり「浜坂町」という町名はなくなったのである。場所はあるのに名前が消滅してしまった。複雑な思いが読める。

「絶対」と言うとき絶対舌を噛み発言していし帰国子女なり　　佐久間得幸

友人のことか。それとも自分のことか。ふつうの読み方ならば作中の主人公は作者「われ」と読む。ここでは作者自身のことと読んでおく。発音がうまくできなかったのだろう。引け目を感じたり、いじめられたり、帰国子女はマイナス要因だったのだろうが、あえてユーモラスに表現しているところが持ち味。

めがね屋の視力検査のランドルト環見えないものを見に行く不思議　　東條尚子

「ランドルト環」とは、視力検査のときの上下左右どこかが欠けた輪のこと。見えるのを確認するためでもあるが、こういわれてみると、なるほど見えないのを確認するためでもある。ひねりの面白さ。

口蹄疫、新燃の噴火大いなる自然に涙し学びたりけり　　熊田新子

霧島が見える宮崎県の農業高校の閉校式をうたう一連。劇的な題材をていねいにうたって魅力的な一連に仕上げている。作者は閉校した学校の教師なのか、それとも何かのつながりで式に参加したのか。もう少しはっきり連作の中で見えるようにしてほしかった。

声だけが思い出せない鳥除けの網に縺れてみひらく雀　　大塚泰子

目の前にいるのは、すでに死んでしまっている雀である。身体はあるが、口や喉はあるが、もう決して鳴くことはない雀。「声だけが思い出せない」という表現に注目。

母の顔知らぬ妹鞍馬寺へゆく道すがらわれを労はる　　岡本貞子

いっしょに鞍馬へ登る姉妹、これまでのそれぞれの人生のドラマが読めるような一首。背後に広がる子ども時代からの物語を読者に想像させる。

よその子を叱れる母の怒気に耐え命を鈍く光らせる子よ　　奥田亡羊

やや分かりにくいのは、「よその子」と「わが子」二人が出てくるからだろう。わが子は、よその子に気を使っているのだろうか。二人の子、母、そして三人を見守る父。四人がそれぞれ別のことを思っているらしいことまでが読める。